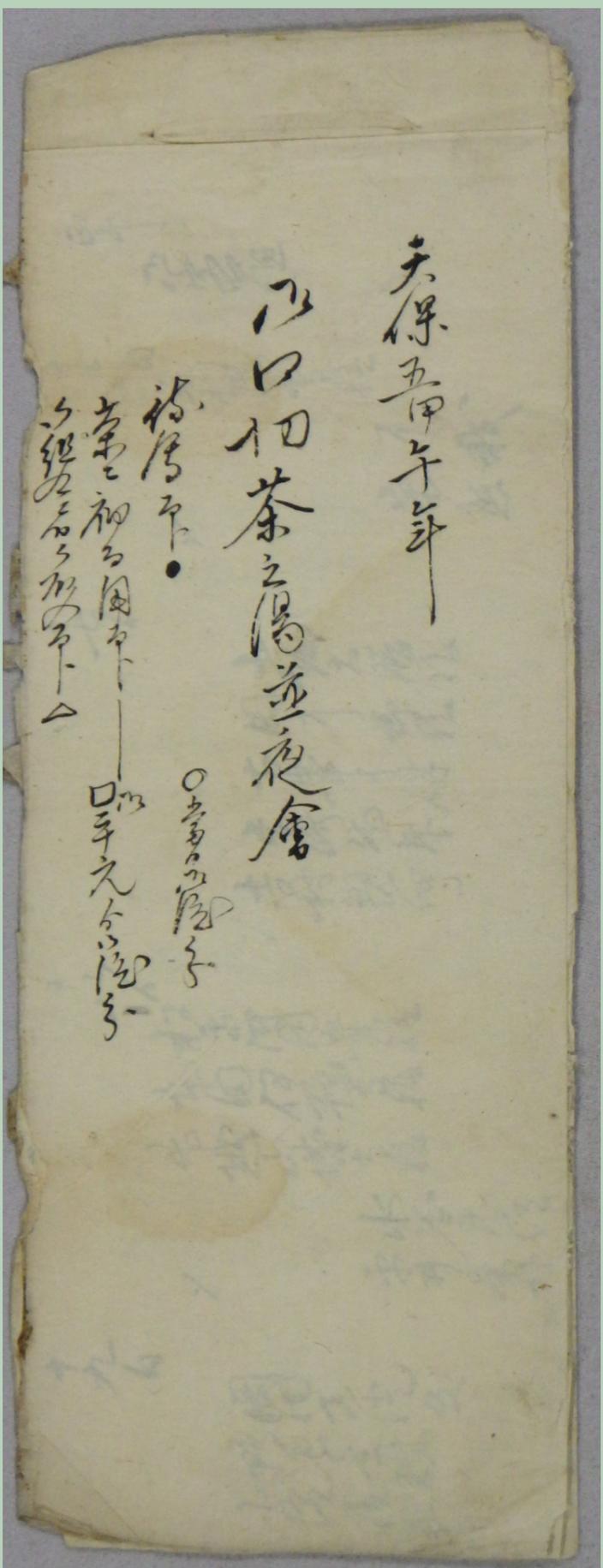


本資料は、天保五（一八三四）年十一月十六日から十九日の四日間にわたって催された茶会の記録です。口切とは、ひと夏、口に封をした茶壺で保存したその年の新茶を、秋に封を切って取り出し、茶臼で挽いたものを用いて開く茶事のことです。茶道では、一年のはじまりに相応する大切な行事です。

内容を解読すると、招待された客は新発田藩主溝口家と姻戚関係にあった人物、後に十代藩主直諒の子が嫁いだり、養子に入る大名家、江戸に在住する著名な学者や、直諒（翠濤）と茶道を通して交流があった茶人や目利きが名を連ねています。また、使用されていた道具類は、藩の蔵に納められていた大切な茶道具を確認することができます。また、使用されていた道具類で行われた茶会の記録と推察されます。当日の食材を用いる「献立」の内容が記されていない（⑨・⑩）ので、事前準備のために作成された記録の可能性ががあります。

本資料は、関谷兵内関連の資料に混じって収集家から寄贈された文書で、他に天保四年の茶会記が含まれていました。天保五年は、兵内が二十一歳のときにあたります。地方の武家社会では、元服後、家督を相続するまでの間、藩主に従って江戸へ参勤し、一定期間江戸詰めとして藩主の警護や身の世話をする傍ら、武道や学問の研鑽を積むことがあります。兵内が江戸へ行った記録は確認されていませんが、江戸で見聞を広め、作図の技術を学んだり、藩主に接する機会を得て、茶会の手伝いに動員されたり、藩の蔵に納められた書物や、物品の整理に携わっていたのであれば、この時期、後年世界地図を写すなどのきっかけがあったのかもかもしれません。

「関谷兵内が描いた新発田藩」解説シート（新発田市立歴史図書館 鶴巻康志二〇二一）



表紙

天保五甲午年

（一八三四）

御口切茶之湯並夜會

待合印 ●

○当日御渡分

茶二初而用印

□手元方御渡分

御組合付被取入印△

本文中に ● ○ △ の記号は記されていない。

一方、「茶二初而用印」と「□手元方御渡分」が線で結んである。

御口切茶之湯並夜會①

天保五年 溝口翠濤による口切の茶事

正午
御客組

十六日
毛利甲斐守様

了我
宗態

十七日

小堀大膳様
岡了節様
古筆了伴
長崎升斎
吉村観阿

十八日

松平河内守様
本田伊豫守様
竹越山城守様
水谷斎但
平井栄朴

水谷斎但
平井栄朴

十九日

岡田真澄殿
鴨池玄琳
小濱様
御隠居

正午

御客組

十六日

毛利甲斐守様

了我
宗態

十七日

小堀大膳様
岡了節様
古筆了伴
長崎升斎
吉村観阿

十八日

松平河内守様
本田伊豫守様
竹越山城守様

水谷斎但
平井栄朴

十九日

岡田真澄殿
鴨池玄琳
小濱様
御隠居

毛利甲斐守は、長府藩主十一代藩主毛利元義（一七八五〜一八四三）。長男の元寛（一八〇二〜一八二七）の時はすでに亡くなっていた。正室として直侯の娘・直諒の妹（もしくは姉）の美弥姫が嫁いでいる。長府藩の江戸藩邸は、現在六本木毛利庭園（テレビ朝日ニューススタジオの背後）となっている。

了我（本屋惣吉）（一七五三〜没年不明）江戸の目利き、道具商。松平不昧とも交流があり、不昧の茶道具も収集に貢献した。このとき八十二歳に達し、江戸の目利きの中で重きをなしていた。（宮武慶之二〇一九『知られざる目利き白醉庵吉村観阿』淡交社）

小堀大膳宗中は、遠州流茶道八代宗匠

岡了節 寛政八年まで小石川療養所医師を務め、寛政九年から奥医師として徳川家斉・家慶の信頼を得る。天保十四（一九四三）年に医師最高位の「法印」に叙される。（戸出一郎2002『医学館における医学考試について』、『日本医学雑誌』四八巻二号）

古筆（筆）了伴は書跡鑑定家
長崎浩齋ならば、高岡藩の蘭方医（一七九九〜一八六四）。大槻玄沢の芝蘭堂で蘭学を修め、二度目の江戸滞在（一八一七）以降「浩齋」を名乗る。

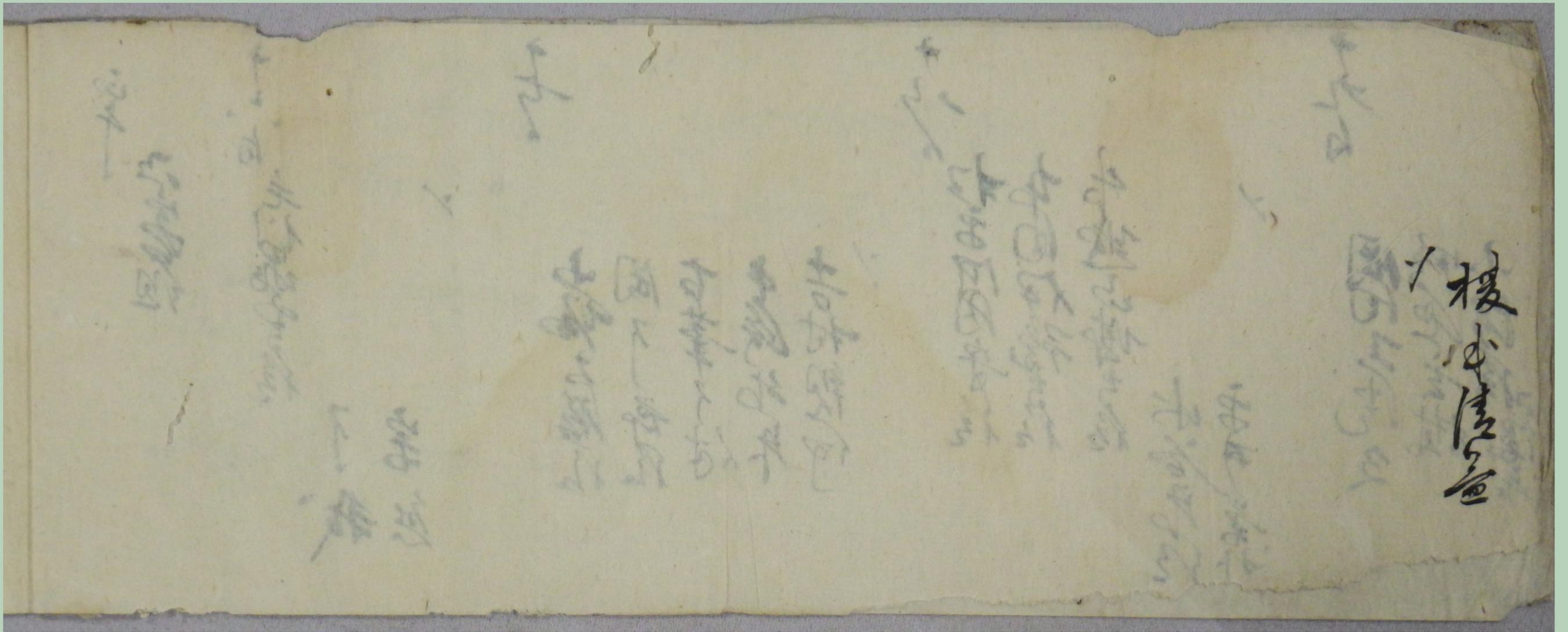
小堀宗中、古筆了伴、吉村観阿は、茶道を通じ溝口翠濤（直諒）と交流していた人物。（宮武二〇一九）

戸田松平河内守光年は信濃国松本藩七代藩主（一七八一〜一八三七）
九代藩主光則の正室として、後に直諒の娘貞姫が嫁いでいる。

本多伊予守忠升は伊勢神戶藩五代藩主（一七九一〜一八五九）。後に直諒の六男が六代藩主となる。
忠寛の養子に入っている。

竹腰山城守正定は美濃今尾藩主で、正室は三日市藩主の娘。子の兵部正富が嘉永三年に翠濤と茶会で同席した記録がある（『翠濤侯遺芳集』野村瑞典一九八八）

岡田真澄（江戸の国学者一七八三〜一八三八）。父は寛政の三博士のひとり儒学者の岡田寒泉。



榎本清益

御口切茶之湯並夜会③

天保五甲午年十一月御口切

待合

一、刀掛 赤杉柱

一、青貝硯箱

一、松梅蒔絵 三ツ道具口

一、書画墨 墨敷黒らしや口

一、のり入染付扇形口

一、桑龍光院透たはこ盆

一、染付火入

一、青竹灰吹

一、単や張きせる浄益カ

一、奉書包たはこ入

一、鉄象かん香燵はし口

一、大内湯わかし 敷物畳もの小形

一、海老手火生 敷もの

曲輪湯盆

一、浄本湯のみ

一、織部香星入

一、小芋籠炭斗

一、真鍮はりぬき火おこし

一、白かん 三ツ羽口

一、ヤンホこぼし

天保五甲午年十一月御口切

待合

一、刀掛 赤杉柱

一、青貝硯箱

一、松梅蒔絵 三ツ道具口

一、書画墨 墨敷黒らしや口

一、のり入染付扇形口

一、桑龍光院透たはこ盆

一、染付火入

一、青竹灰吹

一、単や張きせる浄益カ

一、奉書包たはこ入

一、鉄象かん香燵はし口

一、大内湯わかし 敷物畳もの小形

一、海老手火生 敷もの

曲輪湯盆

一、浄本湯のみ

一、織部香星入

一、小芋籠炭斗

一、真鍮はりぬき火おこし

一、白かん 三ツ羽口

一、ヤンホこぼし

香星入ハ香煎入れ
養生糖などの小粒の菓
子を入れて振り出して
用いる器

ヤンホハ椰子の実を二
つに割った容器